



103号  
2005/5/1

日中文化交流市民サークル 'わんりい'

東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://users.hoops.ne.jp/wanli-jp/>

Eメール: [wanli@m2.ocv.ne.jp](mailto:wanli@m2.ocv.ne.jp)

ホームページは毎月5日頃までに更新を務めています。



ごはんの!きょうだい揃って食卓を囲む。タイ、バンビナイ難民キャンプ。 安井清子氏撮影

### 'わんりい' 103号の主な目次

中国紹介⑩〈福建省・土楼5〉	2
「内モンゴル植樹旅行／寄せ書き集」	4
ラオス・モンの子どもたち・刺繍絵本・子ども図書館	7
ピースポート105日間の旅Ⅲ	9
何媛媛来信⑭「婚姻にまつわる民俗」	10
中国を読む【番外編】	10
松本杏花さんの俳句	10
どうぞお出掛けを!〈サークル祭とケニア料理講座〉	11
【休憩室】行ってみませんか?慕田峪長城	11
わんりい掲示板	12

### 〈サークル祭 2005〉 5月21日(土)、22日(日)へご参加を

サークル祭りは麻生市民館を利用して活動しているいろいろなサークルが実行委員会を構成し、自主的な企画運営による年に一度のお祭りです。それぞれのサークルの日頃の活動状況を紹介PRする楽しい催しが沢山あります。

この両日のみは、麻生市民館の助成で会場費が免除されますので、殆どの催しの参加費は無料が実費程度です。

'わんりい'の催し内容は、11pに掲載しましたが、その他の催しも見逃せないものいっぱいです。会員の皆様にはサークル祭り全体のプログラムをお送りいたします。ご覧頂き、是非お出掛けくださいまして、各サークルの皆様とともに楽しんでいただければと存じます。お出掛けをお待ちしております。

♪♪ 笑顔が美しくなる ♪♪

### 「中国語で歌おう会」 会員募集中!

明るく楽しい中国人歌手・趙鳳英さんと歌いましょう!



5月の講座 5月13日(金)  
19:00 ~ 20:45

麻生市民館・視聴覚室(新百合ヶ丘駅下車北口3分)

#### ●5月の練習曲「彩雲追月」

日本では、南の花嫁と言う名で親しまれ歌われています。明るく楽しい歌です。

指導: 趙鳳英さん(中国四川省出身歌手)

体験参加歓迎! ご自由にご参加ください!!

体験参加費: 1500円

ご参加される方は録音機をお持ちください。

問合せは、「わんりい」事務局へどうぞ

●5月21日(土)サークル祭り特別公開講座 参加費無料  
指導曲「いつでも夢を」 ご自由にご参加下さい。

■ 'わんりい'の催しのお問合せとお申込みは TEL & FAX 042-734-5100 'わんりい'



土楼民俗文化村の目玉は振成楼ですが、他にも一見の価値がある楼が複数あります。奎聚楼と福裕楼と如昇楼です。

奎聚楼は、振成楼前の道を歩いていき川をわたって左側数分のところにあります。傾斜地に建てられたため、入口が通路正面ではなく横道から入っていくといきなり門前の小広場に到達するといった、変わったつくりになっています。この楼は1834年から5年かけてつくられたそうです。小山を背に前は畑なので、正面上階からの眺めは広く円楼のように内側しか見えないうことはありません。



**宮殿祖堂：奎聚楼の祖堂。楼内にそびえたつ**



**如昇内部：小さな円楼の内部。3階建てだがまだ何家族か住んでいる。**

ただ円楼ではなく方楼の

形をとっており、中央にも祖堂があり住居と続いているので中庭がほとんどありません。四面のうち門の正面（つまり一番奥）にあるところだけ高くなっており、祖堂部分も4階建てなので楼閣のように見え、それで宮殿式土楼と呼ばれています。住居のつくりは他とかわりありませんが、内部を見渡す限りでは狭く感じてしまいます。建物のつくりとしては単純ではないのでカッコイイのですが、住むとなると眼前が開けていないと開放感がありません。

建物に入るまでは他の建物を通過する必要があり、外から入られにくいつくりになっているので建物としては頑丈です。祖堂の上階もちょっとした空間が各階にあるので、小祖堂があるような印象を受けます。

福裕楼は、振成楼を建てた林一族のうち最も裕福だった時期の3兄弟及びその家族の住居として1882年に建てら



**福裕楼全景：永定県で最大の五鳳楼。外観もきれい。**

れました。この建物は土楼ですが円楼でも方楼でもありません。五鳳楼という形式で、鳥が羽を広げたような形に似ていることから名づけられたようです。五鳳楼とは、中央に堂が3つ直線に並びその両脇に堂をつなぐまたは囲む形で住居となる建物がついた建築方法のことをいうそうです。形は必ずしも固定ではなく、堂が3つでなかったり両脇の建物が2つ以上だったりバリエーションはあるようです。正門が中央にあり、後方の堂に向かうにつれて階が高くなることが多いようでそれが前方を鳥の頭、後方の高い建物を翼になぞらえたのかもしれませんが。この建物の特徴は、居住地域によって住居人の身分や地位が明確になることです。福裕楼は振成楼をつくった一家の前世代の3兄弟とその家族のための建物で、居住区画は大きく3つに分かれています。建物そのものに入る門（横にあり割と小さい）を入ると、前庭がありそこから既に区域は3分されています。つまり、大門の先にはまた新たな門が3つあります。内部で一部つながってはいますが、基本的には3つに分かれた居住区になっています。中央は明らかに長男の領域で、門を入れてすぐの堂は中央しかなく、一番奥の居住地域は最も高くなっています。堂の装飾はどこの土楼よりも立派で、芸術のようです。両脇の二男三男用と思われる区域は堂がなく、中央に小さな中庭をもつ方楼のようになっています。そちらのほうは芸術的建物というより、居住に適したつくりになっているように感じました。

現在でも林氏の一族が暮らしています。我々観光客は彼





福裕楼と如昇楼：川をはさんで斜めに位置する。この二つは必見。

らの居住地域を参観しながら歩くわけですが、特に男性の顔を見ているとそれぞれ似ていることに気づきました。振成楼内で観光中、振成楼と福裕楼の子孫である林氏が営業しているのに出会いました。彼は楼主として食事、宿泊など観光客用にいろいろあっせんしてくれるようです。その後福裕楼に行ったら同じ彼がいました。福裕楼では、食事をしていくようになりしつこく勧められたのですが出てくるものにあまり自信がなく、結局本物の「客家料理」は食べませんでした。これだけ土楼が好きでも、まだ土楼内に宿泊したことがないし土楼内で食事をしたこともありません。一度は経験しておくべきなのかなとも思います。福裕楼内には観光客が宿泊することはできないようですが、振成楼をはじめ周囲にはいくつか泊まれる場所はあるようです。

福裕楼は建築物としても立派な芸術品ですが、人が住まなくなった箇所はかなり荒れ果てています。住居というものは、人が住んでこそ掃除や修理がなされ建物としての価値が出てくるのかもしれませんが、そのままにしておく



福裕楼扉：中央の建物の入口付近。彫刻がすばらしい。



祠：日本とはまた違ったつくりで面白い。

床もぬげそうな勢いの場所があります。個々の装飾などが立派なだけに惜しい気がしました。

如昇楼は、直径が小さいことで有名です。小さな円楼で1901年から3年かかってつくられました。3階建てで16部屋あ

ります。その直径は17メートルで、数ある円楼の中で最も小さいといわれています。中に入るとその小ささはよく実感できます。1階に各部屋の炊事場があるのですが、まるで合宿所のように隣と接近しています。階段も部屋数が少ないので小さく狭く感じました。部屋の大きさも小さいような気がします。中国の農家であれば、その建物だけで一家族が住んでいるような広さなので、満室の場合はすべての音がどこにでも響きわたりそうです。楼名の由来は、米をはかる升のように小さいとか、日昇のように光輝くという意味があるそうです。小さな楼ですが、2箇所の階段に沿って石れんが造りの防火壁が設けられ火災対策がなされています。

この楼は福裕楼の斜め向かいにあり、福裕楼からは小川をはさんでよく見えます。他の円楼と比べてもかわいらしくて、写真を見ても小さくて面白いです。逆に、如昇楼裏の小高いところから福裕楼全体を見渡すと、これまた美しい建物であることがよくわかります。

この3つの土楼以外にも、この村には方楼がたくさんあります。建築年代もいろいろで数百年前のものから20世紀までいろいろあるようです。方楼にもいくつか入りましたが、大体中のつくりは同じなので上記3つほどの特徴はありません。

他に面白かったのが、土地神をまつた祠があることです。振成楼から徒歩2分ほどのところに大きな木があり、その下に小さなかわった建物があります。何だろうと思い聞いてみたら土地神とのことでした。昔、西遊記を読んでいたら孫悟空が見知らぬ土地ではまず土地神を呼び出して状況を聞いていましたが、そんな話を思い出しました。

この洪坑村は、いろいろ見ているとあっという間に時間がたってしまいます。中国での現地ツアーでも振成楼ともう一つくらいがせいぜいのような気がします。土楼博物館や福裕楼など特徴のある土楼をめぐるには半日くらいはかかりそうですし、もっとよく見ようとするとそれこそ土楼内に宿泊してじっくり見ながら住人と交流して気分までその気になるほうがよいかもしれません。

## 内モンゴル・西ウジュムチン植樹旅行・草原のウルルン滞在記寄せ書き集

### ▶内モンゴル植樹の旅

出発前、ある旅好きの友達は「私だったら絶対行きたくない」とのこと。二日目、シンリンホトから、植樹予定地の西ウジュムチンへ車で向かう道中は黄塵が吹き荒れ周囲が何も見えずまるで煙の中を走っている様で、やっぱりこれは大変な旅だと参加を後悔する気持ちが少々。が、この凄まじい黄塵体験は日本ではないことです。

その後の植林、事前に穴が掘ってあり木を植えるだけと聞いていたので、何かお偉い方が植樹をする様で「苦勞せず形式的のものになるのでは」と思っていました。実際は、穴は掘られてなく穴掘から始める事が出来たのはよかったと思います。

私も初め鶴嘴で5、6箇所、凍土を掘って木を植えたのですが、力仕事は男の人にならず、穴掘りは男子にまかせ木を植えることに専念、一本でも多く自分で植えて帰りたいという気持ちなり、その作業が苦勞ではなく楽しかったのは意外でした。植えた木々が枯れずに成長し、更に植林を続けて立派な林になることを祈らずにはおられません。

夏には緑の草と花々に覆われ、牧場の朝 内モンゴル・西ウジュムチン 小野寿子撮影  
るモンゴルの大草原、頂上の広さに驚かされた山荘裏山へのハイキング、星々が日本で見るとより大きく輝いていた夜空、日本人の口に合うも管理人心尽くしの豪華で美味しい山荘での食事、馬頭琴の生演奏、そして村人の素朴なやさしさ、等々どれをとっても感動、感謝です。

北京での慕田峪長城の頂上からみた雄大で美しい景色も

忘れられません。20年以上も前に観光客とし登った時の記憶は長い城壁のみですが、今回は時期、天候に恵まれました。青空を背景に延々と続く長城は満開の白花の桃の樹々でどこまでも飾られていました。カササギも初めて近くで見ることができラッキーでした。素晴らしい思い出っぱいの旅でした。(若林圭子)

### ▶モンゴルの丘に緑を!

~「チ・ブルグットさんと行く内モンゴル植樹の旅」に参加して~

4月8日、目指す西ウジュムチン<sup>ウジュムチン</sup>へ向けて、桜満開の東京から先ず錫林浩特<sup>シリンホト</sup>へ。到着は夜半で僅かに点燈する街灯以外何も

も見えず。翌朝目覚めたホテルの窓からはきれいに稜線を描く木一本無い低い山並み、これから始まる草原紀行に期待で胸膨らむ。ただ気になるのは昨夜から聞こえるヒューヒューという風の声。出発時には先ほどの山並みは何処へ? バスが草原に入るところは、視界数百メートル。目の前の道と車窓下に見える僅かばかりの枯草のみ。これがあの黄砂!? 何も見えない草原をただひた走りすること約3時間、最後の難関、轍に残る残雪と凍て

つく大地にバスは行く手を阻まれ、四駆に乗り換えて、やっとチ・ブルグットさんの山荘に到着した。

ホテルで飲んだモンゴル茶「奶茶(ナイチャ)」とは二味も違う美味しいお茶をはじめ、初めて口にする草原料理に身も心も暖まって、さあ! 植樹開始。が、自然は甘くない。風は一向に治まらず寒い。どっさり着込んで出掛ける。場所は、



牧場の朝 内モンゴル・西ウジュムチン 小野寿子撮影

## モンゴル草原滞在記

ウジュムチン滞在の二日目、4月10日は晴天。青い空、白い雲、草の海を渡るそよ風、おいしい泉の水、たおやかな形状の草の丘、牛や羊やヤギの放牧、じいちゃんやばあちゃんと暮らす三世代家族、全部、ああこれぞモンゴル! です。午後、山荘の裏山、王様の名をとったカシュカタンハンオール(△1840m)へトレッキングをしました。山荘のあるところは標高約1400m、往復約3時間の行程です。山頂は平らで、360度の展望が得られると聞いてはいましたが、よもやこの山頂で地平線の果てを見るところとは思ってもよらぬことでした。(中国式過剰表現ではない。)

最高峰つまり山頂平地の真中辺りには祭祀用のオボ(ケルンのような石積みの上に木組みやぐら)があり、いくつもの青とオレンジの三角旗が風に揺れています。近くに酒瓶が割れて散乱している様態を見て、神様を担いで酒盛りをする国のわれわれは祭祀後の宴のあとを想像したのですが、モンゴルでは祭祀が終わると酒を捧げて帰るそうです。風で倒れてビンが割れ、散乱していたというのが本当のところのようです。信仰心は日本よりずっとピュアで篤いのでしょうか。この山も山荘のある領主の土地だそうです。

その夜は夢のような満天の星空でした。(小野寿子)



子羊はおともだち 小野寿子撮影





植樹 河本義宣撮影



植樹風景 田井千鶴子撮影

雪解け水流れる小川(氷河の跡) 向側の、白樺林に続く草地で、今日の目標は500本。私達一行10名に地元2名が参加する。一つの穴に二本ずつ植えるとのこと、250の穴掘りと植込みに「汗を流す」と書きたいが、実際は寒くて汗など流れない。一穴に二本は、厳しい環境に耐えて確実に活着することを願ってのモンゴル流？日本とはかなり異なる植樹風景でした。

翌日はうって変って、風もなく暖かで、残り500本を午前中に完植。なお、植樹した木は「モンゴル松」、もみの木に似ている。午後は陽気に誘われて裏山(クシク騰汗山<sup>カンエカタンハンヌール</sup>): 1800m余)に登山。白樺の疎林を過ぎた辺りに、5~6mになる立派なモンゴル松数本を見かけた。今朝、植えた木が、何年か後にこの自生のモンゴル松と同じ高さに成長するのかと、無事の活着を願って山頂のオボ\*に祈りを奉げて下山する。

(河本義宣記)

\*オボ: モンゴル族の風習で、草原や丘の頂に石を高く積み上げて祭壇にしたもの。

### ▶ チ・ブルグッドさんと行った内モンゴル植樹の旅

成田出発から二日目の午後、目的地西ウジウムチン高原の山荘に到着。ページュの絨毯を敷き詰めたような大地、澄み切った空は藍色、辺りは羊も馬も見えなくしんとしている。深呼吸したら冷たい空気に噓せてしまった。

荷物を降ろし、大好きな水餃子をお腹いっぱいいただいて、さぁ植樹。寒がりやの私はいっぱい着込んで、ビニール手袋の下に毛糸の手袋、用意してくださった長靴を履いて完全装備。それでも最初は指がかじかみ、長靴の底が深深

と冷たく感じて、初日は思うように作業できなかった。

二日目にはだんだんコツを覚えてきて、斜面の角度に合わせた植え方、凍った土の塊の埋め方など工夫しているうちに、寒さも忘れていた。田井さんがバイさんと気持ち良さそうに歌を歌っている♪ 藍空 白雲♪

“大きくなって又会おうね!”と願いながら植える余裕さえてきた頃、一千本の植樹作業は終り。(鈴木暁子記)

### ▶ 琴と唄と華と ~克什克騰汗王山へ登る~

私は、今モンゴルから持ち帰ったばかりのCDを聴きながら旅の思い出に酔っている。

はじめ、その山はゆるく穏やかな丘のように思えた。しかし、山頂付近はただ、ただ広く、山頂をなかなか特定できず皆であきらめて帰ろうと思った。が、なおも進むとやがて色とりどりの幟に飾られた祝典場があり、それを我々は山頂と確信した。なおも少し行くと眼前に広大無辺の大風景が現れ、私はこれぞ山の彼方の極楽浄土なりと瞬時に得心した。

そして、夏は華麗な花々に飾られるであろう山頂草原を後に残雪を踏みながら豪華な晚餐の待つ赤い屋根の山荘を目指して下山した。我此酔(恋)未不覚醒。(沖田辰夫)



克什克騰汗山の山頂からの眺め 沖田辰夫撮影

### ▶ 命の洗濯

4月9日、広漠とした薄茶色の大地に詩情を感じつつ、植樹予定地である西ウジウムチンに向かう。山荘近くは雪解けの悪路となり、車も会話も弾みながらの到着。

午後、長靴に履き替えて早速の作業開始。悪天候で「どうなることやら」と案じながらも徐々に慣れる。翌日は晴天に恵まれ、昨日とは大違い。土との交界りに心安らぎ、「農家の嫁になればよかった」と気楽な気分が変わった。午後は草原の家の裏山に登り360度の大展望を満喫した。

西ウジウムチン滞在最后は市内での公衆浴場の体験。二人用の浴室は30畳もありそうで、左右両脇に浴槽がある。同室利用の二人、3日ぶりのお風呂でお互いに豊富に流れ出るお湯を溢れさせてゆったり浸かった。気がつくとも配水が悪く、浴室の床にお湯が溜まって2足のサンダルも気持ちよさそうに泳いでいた。

振り返れば、やさしさ、気配り、美味しい料理、馬頭琴の音色、歌声そして星空と、‘命の洗濯’をした3日間の草原生活の体験だった。(日高敦子)

## ▶一粒の種

「植樹の穴は準備してあります」旅行の案内にはそう書いてあった。私は、1989年山西省臨汾郊外での、まるで天皇陛下の記念植樹のような植樹式を思い出していた。

各自、寒風の中、ショベルや鶴嘴を持ち、山荘から150m程下り、岩のごろごろする氷河のなごりだという細い流れを越えて白樺林脇の植樹予定地に向かった。束ねて渡されたのは1mにもならない細い苗木であった。モンゴル松とのことだが、モミの苗木に似ている。ショベルを突き立てるが力を入れても20cmくらいしか入らない。地面の下はまだ凍っているらしい。ショベルの柄を2本も折った。凍えながらの作業は2時間で500本。

翌日は、朝から打って変わった快晴。谷川の氷も解けてせせらぎ始めた。午前中、残りの500本を植えた。かつて、世界の四大文明発祥の地は緑豊かな大地であったという。文明とは木を切ることで成り立ったらしい。木がなくなると文明は滅んだ。なんとという矛盾。

我々の作業は、広大な土地に一粒の種を蒔くようなものであった。しかし、明日地球が滅ぶとも一本の木を植え、一粒の種を蒔こう。‘我々の植えた小さな細い苗木よ、どうか、どうかこの大草原に根付いてくれ給え’ そう心から祈った。(細井昌文)

## ▶神戸より「内モンゴル植樹の旅」に参加して

内モンゴル・シリントより黄砂に煙ぶる草原をミニバスで目的地の山荘に向かう道は、ただ、ただ真っ直ぐ。彼方に山があればそのまま上に向かいけぶる空に溶けていく。人は天にスウッと入って行け、天女は足を下ろせばそこは草原。思わず、ここには「お伽噺」が沢山あることなのでしょうと話したことです。黄砂に煙っていても茫漠たる大草原。日本に生まれ育ったものには、一度はそういうところに身を置いてみたいという夢、静かな感激でした。

植樹地は、白樺林の隣地。未だ、せせらぎが凍り、雪が斑に残る黒い土は、保水力もあり、肥料(羊、山羊、牛)、も豊富です。きっと苗木は育つでしょう。

ただ、この広い草原に1000本はあまりにも小さな一滴。是非、地元の小学生を交えて毎年少しずつでも植樹が続けられ、「わんりい」も2、3年毎にでも替り合って関われれば、何十年後にはきっと立派な森になるでしょう。そうなることを祈っています。

(田井千鶴子)



## 【報告】馬頭琴演奏者、チ・ブルグッドさんと行く内モンゴル植樹の旅 2005年4月8日(金)～15日(金)

2004年12月7日に開催された馬頭琴の演奏会「飛べよ！鷹よ！モンゴルの空高く！」は、内モンゴル出身のチ・ブルグッド氏の熱い希望により、収益金を内モンゴルの植樹に当てる演奏会でした。その折の会場カンパ、収益金及び‘わんりい’の拠出金を合わせた15万円を現地での苗木購入費に当て、植樹適切な4月の‘植樹旅行’の準備をチ・ブルグッド氏にお願いしました。この度、チ・ブルグッド氏を含めて10名が現地へ赴き、モンゴル松、1000本の苗木を無事終了することができました。

シリント地方西ウジウムチン旗は内モンゴルでも最も草原の美しい地方と言われています。植樹予定地はその西ウジウムチンの地域の中で、旗の公務員バインムートル氏の兄弟4名が政府より30年間牧場地として貸与された地域の中に200<sup>ム</sup>畝\*が予定されていました。

シリント到着以来行動をとともにして心配りくださったバインムートル氏は公務員で、旗の林業課で森林保護を務める役職にあります。公務員は政府からの牧草地の貸与はないのだそうですが、兄弟に貸与された牧草地の広さ何と300,000畝とのこと。そして、この広大な牧草地の中には氏の義理の兄弟の家族とチ・ブルグッド氏の山荘しかなく、裏山カシエンカタンハンオールの克什克騰汗山(1800m)も前山も敷地にすっぽり入るとのことで想像を絶します。苗木

は幼くか細いこともあって2本を一組として植え、結局、克什克騰汗山の山裾、白樺林の隣接地の100畝が植樹に当てられました。

植樹に選ばれたモンゴル松は、克什克騰汗山山頂付近に原生している樹木です。滞在二日目の快晴の朝、きりりとした三角形の樹形が霧氷を被って青い空にきれいに並んでいました。

さて4月、現地の雪は日陰に残す程度になっていましたが、地面の中はしみこんだ雪解け水が凍ったままで、寄せられた文章にもありますように、予定外だった穴掘りはかなり大変な作業でした。けれども、凍土は間もなく解けて苗木がしっかり活着するための優しい協力者になるでしょう。この地に来て、初めてこの季節が植樹の適切な期と納得したしだいです。そして、植樹に関わった誰しもがこの幼い苗木が無事根を下ろし、すくすくと成長して欲しいと心から願ったことでした。

西ウジウムチン旗を去る日、入浴も済ませた市内での昼食会には、西ウジウムチン旗の副旗長、事務局長、副事務局長等も参加くださり、それぞれから「はるばる遠路をお出掛けくださり、植樹くださったことに対して旗を代表し深くお礼を申し上げます。」との挨拶を頂きましたことを付け加えます。(田井)

\*畝=中国慣用の度量衡で、土地の面積の単位。1畝は約6.7アール。



# 「モンの子どもたち、刺繍絵本、山の子ども図書館」

— ラオス・モンの子どもたち、刺繍絵本の展覧会に寄せて—

安井清子(山の子ども図書館建設基金)

私がモン族の子どもたちと出会ったのは、タイの難民キャンプでした。当時(今から20年ほど前)、ラオスの山の民・モン族の人たちが大勢、難民となってラオスからタイに逃れ、難民キャンプで暮らしていました。私は難民キャンプの一つ、バンビナイキャンプに日本のNGOから派遣され、難民の子どもたちのための図書館を作るという活動をはじめることになったのです。

「ラオスで戦争があったこと」、「ラオスの戦争で、アメリカが支援していた反共側について戦ったモン族が、国を追われて難民となったこと」、「モン族は元々文字を持たない民族であること」など・・・何も知らなかったし、私自身、何の社会経験もなく、図書館のことも子どもの活動についても何もわかりませんでした。ただ、難民の子どもたちと友だちになることができ、子どもたちが絵本を見て少しでも楽しい時間を過ごしてくれたらいいなというくらいの思いで、日本からたくさん絵本を持って行ったのです。

はじめて覚えたモン語は「ダッチ(何?)」。絵本の絵を見せては、「ダッチ?」と子どもたちに尋ねて少しずつモン語を覚え、身振り手振りも交えながら、子どもたちに絵本のお話の世界を伝えようと必死でした。難民キャンプという柵の中の狭い世界しか知らない子どもたちの心の中に、楽しいお話の世界が広がればいいなと思っていたのです。じきに竹の小屋ができ、毎日、大勢の子どもたちがやってくるようになりました。図書館というよりも、「子どもたちがやりたいことのできる場所」にしたいと思っていました。援助してもらおう立場の難民。自分の国を失い弱い立場の人々。その難民の子どもたちが、「教えてもらう」のでも「与えてもらう」のでもなく、自分で好きなこと楽しいことを自分でやりたいようにできる場所、そんな場所にしたいのです。もちろん、絵本を見る子、絵を描く子、走り回る子、けんかする子・・・やりたい放題、しっちゃんめっちゃかにもなりましたが、みんなやんちゃな一面、弟や妹をおぶって子守をしていたり、水汲み、薪拾いなど家の役割もしっかり担っている子どもたちで、みんな大

地に足を踏ん張って生きているような感じがしました。子どもだまし・・・なんて言葉は通じません。私自身、子どもたちと真剣に同じ目線で付きあって、けんかして、やっと対等に渡りあえるような日々だったのです。

はじめの1年は、子どもたちにせがまれるままに、日本から持ち込んだ絵本のお話を語ることに一生懸命でした。モンには本がありませんから、モンにお話があるなんて思っていなかったのです。それが、ある夜、モンのおとうさんが子どもたちにお話しているのを聞きました。言葉に魂があり、生きている。言葉が踊り、そして心に染みいる・・・そんな語りでした。語り出される言葉が世界を作りだしている。子どもたちは全身を耳にして聞きっていました。モンには民話語りの伝統が色濃く残り、そして代々語り継がれてきたお話があったのです。そんなことを知らずに、外から持ち込んだ絵本のお話だけを一生懸命伝えようとしていた自分が恥ずかしくなる思いがしたのです。

また、モン族の女の人たちは元々民族衣装を美しい刺繍で作ってきたので、刺繍が得意です。難民キャンプでも刺繍のハンディクラフトや、絵柄を刺繍したタペストリーなどが作られて、女の子は小さい頃から、お母さんの隣に座り見よう見まねで刺繍をはじめ、糸と針になじんでいました。

本や絵本はないけれど、モンにはたくさんのお話が語り伝えられていて、そして、絵を描くよりもずっと自由に手軽に刺繍をしているのです。

ある時、子どもたちに「刺繍で絵本を作ってみようよ」と持ちかけてみました。最初から構成を考えるのは難しいから真似てしまおうと、みんなにおなじみになった「おおきなかぶ」の絵本を元にしてみたのです。男の子が布に下絵を描き女の子たちが刺繍しました。できあがってくると、ロシアのおじいさんはモンのおじいさんになり、色とりどりの犬や猫が生き生きとして、なんとも楽しい絵本に仕上がりました。

1冊できてみると、子どもたちは、「刺繍だったら、自分



刺繍絵本の一部





初めて絵本を見る



竹の子ども小屋の前で



絵本を読む



刺繍をする



ペープサートでお話をする

だって作ってみたい」と、我先に作りはじめたのです。男の子が布に下絵を描き、女の子が刺繍する合作の絵本。モンの民話、絵日記風のお話、絵本を元にしたもの・・・あれこれできました。

日本人からすれば、刺繍で絵本を作るなど手間のかかる大変なことです。が、モンの人々にとっては、誰でもが、特に女性だったら、小さい女の子からおばあさんまでができることなのでした。そして出来上がってみると、静的に思える刺繍が、とっても生き生きして楽しいのです。これまでに本がなかったモンの人たちが、絵本を気軽に作り出すなんてことは予想できないことでしたが、刺しゅうがモンの

人々にとっては、一番身近な表現方法だったからでしょうか。全部で100冊近くの刺しゅう絵本ができあがったのでした。

その後難民キャンプは閉鎖になり、モンの人々はアメリカなどに定住したり、ラオスに帰還したり、散り散りになりました。私の手元には刺繍の絵本だけが残っています。

これらの刺繍絵本は、字の間違いもあるし、絵も下手だし、完成されたものではありません。でも、モンの子どもたちが自分たちで作り上げたものです。そして、他の民族には作れない素晴らしい絵本だと思っています。難民だって、少数民族だって、子どもたちだって、援助されるばかりじゃない。みんなすばらしい力を持っているんです。モンのすばらしさを自分たちでも認められるような本ができたこと、そんなことが、竹の小屋から生まれたきたのは、私には一番嬉しいことです。

これから、私達は、ラオスの山の村に図書館を作ろうとしています。電気も水道もない山奥に住む民族、元々文字もなく家には本などないし、「図書館」なんていう言葉も知らない、そんな人々のところに図書館を作るなんて・・・と思われるかもしれません。また、モンの人自身も「本は中央から持ち込まれるもの」と受け身で考えている人の方が多いと思います。

でも、そうではなくて、建物も、そして活動も、みんなの力で一緒に作っていきこうよって思うのです。みんなそれぞれに、得意なこと、そして素晴らしい力をもっている。他と違っていい。そんな自分自身の力を出すことができれば、きっと、みんなの力で面白い、山の村なりの図書館活動ができていくのではないかと考えています。

それは、難民キャンプで一緒に過ごしたモンの子どもたちと、彼等が作り出した刺繍絵本が、私に教えてくれていることです。そんな作品の数々ぜひ見てください。

●安井清子さんの活動に関しては、「ラオス 素敵な笑顔」(NTT出版)「空の民の子どもたち」(社会評論社)「チューの夢 トウの夢」(福音館書店)に詳しい。モン族の衣装・生活を知るには、福音書店刊の「たくさんのふしぎシリーズ2004年11月号」に「わたしのスカート」がある。



旅行社が募集するツアーに参加する場合、最初に組み込まれた行程以外にそれぞれの訪問地で別料金のオブショナルツアーというのがある。

16カ国に寄稿するピースボートにもそれぞれの寄港地で少ないところで4～5コース、多いところでは10数コースのオブショナルツアー(OP)が用意されている。OPはその目的により、寄港地の町や近くの世界遺産を訪れる‘観光’、ホームステイや現地の若者とのサッカーの親善試合などの‘交流’、農作業体験や家庭訪問先でその国の料理を作って食べるなどの‘見聞’、象牙目当ての密漁で親を亡くした子象の孤児院を訪ね、さまざまな角度から密漁の実態をさぐるなどの‘検証’がある。

OPとは別にオーバーランドツアー(OT)といって舟から一時離脱して、次の寄港地から再乗船というツアーもある。たとえば、ベトナム・ダナンで下船し、3泊4日で空路アンコールワット遺跡を訪ね、シンガポールから又乗船するコース。インド文化遺産の旅7日間、タンザニアワイルドサファリ10日間、エジプトアブシンベル宮殿とルクソール7日間、ガルパゴスクルーズ10日間など10コースくらいある。

寄港地での停泊日数は半日～2泊3日である。大半が朝入港し、その日の夜出港だが、寄航時間7時間という慌しいところもある。寄航前日又は前々日に上陸説明会があり、寄港地の気候、港から町までの交通手段、物価の目安、注意事項などの話がある。その中で繰り返し言われることは、‘帰船リミット’(通常、出航時刻の1時間前)に遅れないようにということだ。特に、OPに参加せずに自由行動をするものは、これを守らないと置いてきぼりにされることになる。今までにそんなケースがあっ

たかどうか知らないが…。

下船、乗船する際に、ボーディングカードを機械に通す。パソコンの画面上に出た顔写真で本人と確認できればOKである。入国・出国の手続きは通常乗客全員の分をピースボート側でまとめてやってくれるのでパスポート自分の手元には置いていない。ボーディングカード(IDカード)をその代わりに持って歩く。

今まで5カ国に寄港し、いくつかのOPに参加したが、どれもやや不満が残った。1ヵ月が過ぎ、寄港地での自由行動を一緒にできる仲間もできたので、観光を目的としたOPをいくつかキャンセルすることにした。

ケニアのモンバサを出港した船は、又赤道を越えて南半球から北半球に戻りアフリカ大陸の東側のツノのようなソマリア半島を回って紅海に入った。紅海の塩分の濃度は4%、大体普通の海の塩分濃度は3.4%くらいだろうだ。

\*\*\*\*\*

明日朝、エリトリアのマッサワに入港する。午後1時には出港でわずか6時間余の滞在だがOPではなく自由行動だ。ピースボートのリピーターで、2年前にマッサワにきたことのある人と数人でまちの市場に塩を買いに行こうと思っている。マッサワ近くの海岸沿いにある塩田で作られた自然の塩が市場や露店で売られていて、その塩はミネラルが豊富でとても味わいがあって健康にもよいとのことだ。

マッサワの気温は日中40℃をこえるという。しっかり日焼け対策をして水を持って出かけよう。

(2005年3月5日)

## 針と糸の語りべ

～ ラオス・山の民モンの子どもの刺繍絵本展 ～

2005年5月23日(月)～29日(日) 10:00(初日12:00)～19:00(最終日17:00)

於:ば・る・るプラザ町田6Fギャラリー 【入場料無料】

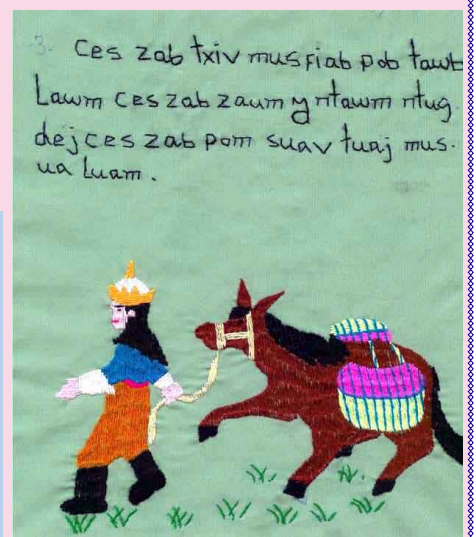
主催:ラオス山の子ども文庫基金 共催:日中文化交流市民サークル‘わんりい’

### 「ラオス 山の子ども文庫基金」(ラオスの山に子ども図書館を作りたい)

ラオスの山に住む子どもたちは、なかなか本に触れる機会がありません。また、現在、急激に変わりつつある生活の中で、民族がむかしから語り継いできた「おはなし」も失いつつあります。

元々、文字を持っていなかった山の民にとっては、「図書館」や「文庫」はなじみのないものですが、これからの子どもたちが、本のおはなしの世界の楽しさを知ること、未知の、より広い世界への扉をあけ、心の世界を広げていくことができる場所。自分たちの民族独自の「おはなし」に改めて出会っていくことで、自分たちのことを見つめていくことができる場所。そんな場所が必要になっていると感じます。そんな場所・「山の子ども文庫」を作りたいと思います。(安井清子)

(ラオス 山の子ども文庫基金 <http://www.t3.rim.or.jp/~pajhnb/index.html>)



モンの民話・ジャーの話



先月の19日、殆どの新聞紙が《天皇家の長女紀宮様と東京都職員、黒田さんの「納采」の儀が皇居で行われた》というニュースを掲載しました。

「納采」という言葉は、中国の古典、四書五経の「礼記」からの出典で、古代の結婚式の「六礼」の一環です。日中文化交流の源は非常に深いことは良く知っていましたが、天皇家ではまだそういう伝統が守られていることを実際に知り、やはりびっくりしました。

「礼記」によりますと、古代には縁談から婚姻を結ぶまでに、納采、問名、納吉、納征、請期、親迎の六礼がありました。

「納采」 男性側が気に入った女性側の家に物品を携えて縁談の申し入れをします。

「問名」 女性側が男性側の申し入れを受け入れますと、男性側は女性の名前、生年月日また生母の名前を訊ねる書付を女性側の家に送ります。

「納吉」 男性側は了解した女性側の状況について占いをし、「吉」であれば縁談を続け、「凶」であれば中止します。

「納征」 「納吉」の結果が「吉」であれば、男性側が金品を携えて女性側の家を訪れ、婚約を成立させます。

「請期」 男性側が、結婚式の日期を書いた書付と物品を携えて女性側の家を訪れ、女性側が書付と物

品を受け取りますと、その期日が認められたこととなります。書付と物品が受け取られない場合は、その期日に不同意であることを表し、結婚の期日を改めなければなりません。

「親迎」 結婚式の当日、男性側は、女性側の家に行き、花嫁を迎えに行きます。

以上の「六礼」は、古代に貴族や、家柄のいい家庭では厳しく拘っていたそうです。時代が下って庶民の間にも広がりましたが、それぞれの家庭の事情によって省略されたところも少なくありません。

「礼記」の時代から今まで、すでに2000年以上たちました。中国でも、今の大都市から田舎まで、婚姻に関する情況は時代の流れに伴って大きな変化があります。恋愛結婚やら、見合い結婚やら、結婚の形式はさまざまですが、中心部から遠い町や、田舎では、其の六礼の面影をとどめている婚姻形式を残っているところもまだあるようです。

(続く)

何 媛 媛：本名、何 向真。

山西省出身。山西大学で日本語及び日本文学を専攻し、卒業。一昨年来日して以来、地域の国際交流活動に力を入れ、古箏と中国語を教えています。町田市能ヶ谷町在住。

☎ 042-735-3984

Email:kakoushinjp@yahoo.co.jp

Website:http://www.cn-jp.com

## 中国を読む【番外編】 中国反日デモに思うこと

連日お騒がせの、中国反日デモ。上海で起きたときは本当にびっくりした。日系企業ひしめく上海。個人レベルでの日本人と中国人の交流も活発なはず。個人として付き合いとき、国や歴史を超えて理解することができる、と思っていた。

デモの中心メンバーは愛国主義教育を受けた若い世代。自分たちが実際に接する日本はさておき、歴史や教科書、マスコミのなかの日本が膨れ上がってのことか。政府やマスコミが与えた情報だけに重きを置くことは、危険だ。情報のあやつり人形となるからだ。あやつり人形の暴徒化。デモに参加したある若い女性は日本のコミックを愛読していた。彼女が憧れる主人公たちも、デモ隊が石を投げた相手も同じ日本人なんだけど。

デモの原因となる日中間の問題は多すぎるくらいある。歴史問題、教科書問題、東シナ海のガス田開発、靖国問題、遺棄兵器、常任理事国入りへ反対の声もある。なかでも「日本は過

去の過ちを反省すべき」という声はよく聞く。言われる日本もずきとくる。しかし、この60年間、日本人の兵士によって殺された人間はひとりもない。間接的に戦争に参加していたとしても交戦権を破棄しつづけた60年を生かして、これから何ができるのか、これから大切なのはそこだと思う。

政府の力が強く、規制のあるマスコミ事情の国では、自分の目と頭をフル活用することがどこよりも求められる。デモの呼びかけが行われたインターネットを利用して規制を飛び越えることだってできる。

「日本の若い人が失っている一生懸命さ」を学びたいと、中国の修学旅行を予定していた学校も、相次いでキャンセルだ。一般ツアー旅行にも影響が出ている。中国を理解したくて足を運ぼうにも阻止される。全世界へデモの暴力行為が発信されることも、中国側に不利だ。「愛国無罪」の垂れ幕を前に、愛国とはなんだろうと思う。(2005年4月22日)(真中智子)

## 松本杏花さんの俳句 〈拈花微笑〉 (にえんほあうえいしやお) より

### 大银杏空一面の芽吹きかな

yín xìng shù wēi àn  
银杏树伟岸  
án zhī tǔ lǜ rǎn qīng tiān  
繁枝吐绿染青天  
xīn yá yì mào jiān  
新芽已冒尖

季语：新芽・春。

参天的银杏树繁枝吐芽，象征着古木逢春的勃勃生机。可以想像出，这苍老的树干和娇嫩的芽尖之对比是多么强烈。而作为生命的同一体，二者相互依存，又是多么和谐统一。



## ご参加を！ アフリカ料理は美味しい！

料理講習会〈アフリカ・ケニアの美味しい健康料理〉  
2005年6月19日(日) 11:00～14:00

於：麻生市民館・料理室(小田急線新百合ヶ丘下車北口徒歩3分)

参加会費：2500円(会員：2300円)

問合せ&申込：わりい事務局Tel.042-734-5100

E-mail：wanli@m2.ocv.ne.jp

予定メニュー：

ケニア風牛肉と野菜のシチュウ、チャパティ、  
カチュンバリ(野菜のサラダ) サモサ等

講師：GASPARY MIGWI KIRUTHU  
ガスパレイ・ミグウィ・キルス(ケニア出身)

講師のメッセージ：

ケニアの中部地方にあるニエリというところで生まれ成長しました。赤道の近くです。両親と8人の子どもの家族の長男です。親戚も沢山います。

子ども時代は、畑仕事で忙しい両親に代わり、全部の兄弟の面倒を見ていました。兄弟たちは、自分のことを母親だと勘違いしていたときもあったほどです。地元の小学校を卒業した後、高校と大学と都市部へ行きました。今でも、アフリカの田舎のゆっくりとした生活が懐かしく、又そのような生活をしたいと思っています。何も心配することのない自然な生活です。

現在、日本に来て2年になります。働くこともさることながら、新しい文化を発見する日々です。

ケニアは東アフリカに属し、野生動物や人類発祥の地として有名です。今回は、ケニアの日常料理を紹介したいと思います。ケニアは沢山の民族からなる国家です。それゆえに、料理も民族によってさまざまです。日本では、地元の食材は手に入らないので、日本の食材でも作れる料理を紹介してみたいと思います。

## 【ティールーム】慕田峪長城はいかが？

内モンゴル植樹旅行の帰路、北京で2日滞り、10年来、行ってみたいと思っていた慕田峪長城を訪ねました。1986年5月より開放され、クリントン大統領も中国訪問の際にこの長城を訪ねたそうです。

北京から、八達嶺長城と反対方向へ70キロで、北京空港に行く高速道路を一部分利用する以外は、谷あい的一般道を車で約2時間半。殆どの中国旅行で、禿山ばかり見てきた目に比較的緑の多い道で、車窓を流れる村々の風景は、いかにも中国風のたたずまいで穏やかです。今回、白梅に似た野生の桃花の時期で、あちこちの桃林がいまを盛りと咲いてまるで絵本の中に入って行くようでした。

慕田峪長城登山口から、切り立った山勢の険しい嶺の上を縁取る長城を見上げますと、こちらにあちこちにやはり白い桃花の群生。ガイドさんによれば野生種の桃で実はならないのだとか。

ケーブルカーを横目に緑の木々の中につけられたおよそ1000段の階段を登れば、山並みが広がり、長城はさながら龍となって蛇行して峰々を繋ぎ、この白い花がレースのように縁取ってました。季節が変われば緑となってこんもり茂りそ

## ご参加を！ [あさおサークル祭り2005]

5月21日(土)及び22日(日)

—今年も楽しい催しがいっぱい！すべて無料です—

### ■5月21日(土) 視聴覚室(先着40名 申込者優先)

#### ●10:30～12:00 中国語で歌ってみよう(参加無料)

明るく楽しい日本の歌「いつでも夢を」(作詞：佐伯孝夫、作曲：吉田正)  
指導：中国人歌手・趙鳳英さん

#### ●13:30～14:30 中国民族楽器探検

「華麗なる音色、中国琴！」

演奏とお話：何媛媛さん

①早天雷、②漢宮秋月、③山丹丹開花紅艷艷、④ラストエンペラー挿曲、⑤梅花三弄、⑥知床の旅…日本の歌連奏

日本の琴と中国の琴、形は一見同じようですが、演奏の仕方でも音色もまるで違います。新年会で演奏くださった何さんが、中国のお琴の秘密をいろいろ教えてくださいます。

### ■5月22日(日) 視聴覚視室(先着40名 申込者優先)

#### ●13:30～14:00 馬頭琴合奏と語りによる

「スーホの白い馬」

馬頭琴合奏：万馬東京馬頭琴教室のみなさん

語り：桑原紀子さん

昨年、上演し大きな感動を呼びました。馬頭琴合奏をバックの語りは他では聞けません。

#### ●14:00～15:00 馬頭琴体験

「馬頭琴にさわってみよう！音を出してみよう！」

指導：万馬東京馬頭琴教室のみなさん

### ■5月22日(日)大ホール

#### ●10:30～11:00

馬頭琴大合奏

演奏：万馬東京馬頭琴教室の皆さん11名

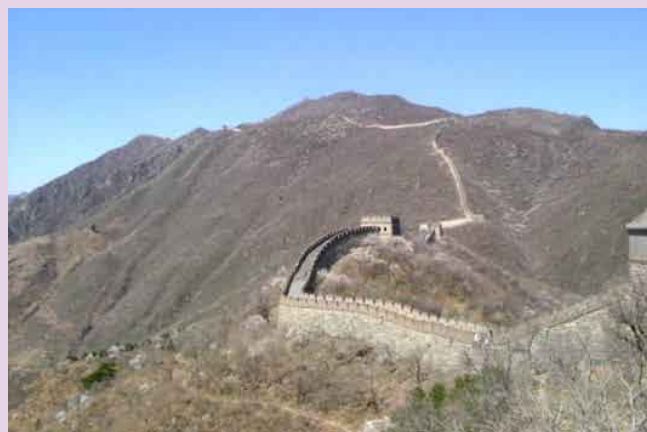
演奏曲目：①窓の蠅 ②ノンジャー ③ガダ・メーリン

④運命 ⑤ウヰムチン・ノットギン・パラ ⑥昇る太陽

※曲目は変更することあります。

れもまた美しいでしょう。野生種の珍しい植物もいろいろあって、スミレの大きな株があちこちに点々と咲いていました。

規模は、有名な八達嶺長城に比べるとやや小さ目ですが観光客は格段に少なく、空気は新鮮です。この日、天気はうらうらと暖かく、空は青く、許されるならばこの長城の果てに行き着くまで歩いて見たいとそそられたのは私だけではないでしょう。おまけに、この辺りにはこの野生種の桃の花の精のように可愛らしい姑娘もいるのですよ。(田井記)



慕田峪長城 河本義宣撮影



— CD「ヘブン・オン・アース」発売記念 —

**ジョージ・ガオ(高 韻青) 二胡コンサート2005**  
カナダより来日の、世界が注目する二胡プレイヤー

- 2005年5月24日(火) 18:30開場 19:00開演  
四谷区民ホール 前売り¥4000 当日¥4500
- 出演: ジョージ・ガオ(二胡)、ジェニー・チャン(ヴォーカル)  
張林(揚琴)、西本梨江(ピアノ)
- 予定曲目: 二胡随想曲(ジョージ・ガオ作曲) / ヘブン・オン・アース(ジョージ・ガオ作曲) 他
- 主催: ジョージ・ガオ ジャパン コンサート ツアー実行委員会
- 制作: ラサ企画・中国音楽勉強会・彩鳳会
- 問い合わせ・チケット申し込み: ラサ企画

TEL/FAX 03-5748-3040

[メールはこちら]

- 中国音楽勉強会 TEL/FAX 03-3428-0600  
E-mail: jfkando@nifty.com
- チケット取り扱い: チケットぴあ 0570-02-9999  
Pコード 194-225

**張勇二胡リサイタル**

「心弦響鳴 — 心に響く美しいメロディ」

高胡や京胡なども弾きこなすマルチプレイヤー、  
張勇さんが「草原情歌」「蘇州夜曲」  
などを演奏。

2005年5月8日(日) 14:00開演  
府中の森芸術劇場(京王線東府中駅北口)  
3500円(当日4000円)  
主催: 張勇二胡研究会府中支部  
申込と問合せ: 042-351-4858(佐々木)



～チベット人声楽家の講演とチャリティーコンサート～

**演題「天に一番近い大地 チベットからのお話」**

～日本とチベット、異文化を越えて～

'05年5月22日(土) 14:00開演(13:30開場)

**町田市民フォーラム3Fホール**

(195-0013 町田市原町田 4-9-8 町田国際交流センター)

出演: **バイマヤンジン** 力強い歌唱力とみずみずしい感性で四川音楽大学に入学、西洋オペラを専攻。日本でただ一人のチベット人歌手として、チベットの音楽、文化、習慣などを紹介している。

主催: (財)町田市文化・国際交流財団(町田国際交流センター)  
http://www.machida-kokusai.jp/

入場料: 1000円(全席自由席)

\*入場料は全額チベットの学校建設のために寄付されます。

チケット申込み: 町田国際交流センター

☎ 042-722-4260

中国旅行は、中国旅行専門店・アクロス中国へ

20年の実績と中国人スタッフと中国留学経験者があなたと一緒に創る中国の旅 ☎ 03-5352-0146

**[延安の娘] 上映会**

～革命の「聖地」に残された娘は、それでも一日、実の親に会いたかった～

日時: 5月27日(金) 20:00開演 120分  
19:15開場 お茶を飲んでいただけます

会場: 茶館銀芽(山王オーディウム)(JR大森駅下車)  
\*定員70名 要予約 お申し込みの方にチケットをお送りします。

料金: ¥2200(中国茶とお茶請け付き)

予約・問合せ: 03-5748-3040 lasanon@db3.so-net.ne.jp

『延安の娘』は、中国で取材したドキュメンタリー映画で、フィクションのような物語性に富んだ作品。「事実は小説より奇なり」というのは真だと思わせませぬ。テーマは実の親探しであるが、その背景には人々の複雑な物語があるのです。文化大革命をご存じの方はまた別の感慨を持たれることでしょう。

特筆すべきは、全編を流れる音楽。延安は黄土高原のまっただ中にある陝北地方の一地方で、新中国成立前は革命根拠地のあった所。自然条件が非常に厳しいため、極貧の生活を強いられてきた地方です。その中で生まれた慷慨激越と評される曲調は、人の心を打たずにはおきませぬ。

**「わんりい」のおたより会員になりませんか?**

— 継続のお願いとお誘い —

入会金なし 年会費: 1500円

「わんりい」とは、どんな意味ですか?とよく聞かれます。「わんりい」は万里の長城の“万里”を中国語読みをしています。民族の文化は万里に繋がると思いついて命名されました。

「それぞれの国や民族が長い歴史の間に培った、それぞれの文化を知ることは、国や民族を超えた理解のきっかけになるのではないか」という趣旨で、市民レベルでの国際友好を目指して1992年より活動している市民ボランティアの会です。

会名に日中の冠がありますが、主として位の意味合いで、気楽にいろいろな国のかたがたと交流しており、

これまで目的に添った講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を数多く開催してきました。おたより会員になりますと、会のすべての活動に参加でき、会報「わんりい」(原則として、年10回発行)をお送りします。

活動の様子は、会報「わんりい」や「わんりい」のHPでご覧いただければと存じます。文化は国を超えてつながっています。多数の方々のご協力やご参加を頂いて幅広い活動で楽しみたいと仲間を募っています。

尚、事務処理上、会費納入月は毎年4月です。お手元に振り替え用紙をお持ちでない方は事務局までご連絡いただければと存じます。ご継続、或いは新規入会いただければ嬉しく存じます。

尚、会費は、「わんりい」の郵送費と活動のサポート費に充てられます。問合せ: わんりい事務局(1Pに掲載)

●「わんりい」会報は、川崎市麻生市民館、川崎市多摩市民館、町田市民フォーラム4F国際協会、神奈川県国際交流協会、アクロス中国・新宿本支店で自由にお取り頂く事ができます。

**“わんりい”の原稿をお寄せください**

「わんりい」の会報はどなたでも自由に投稿できます。できるだけ多くの方に関わっていただき楽しいものになって欲しいと願っています。

中国に限らず、アジア諸国との友好と理解とに関わる活動体験や文化の紹介、映画や観劇の感想、読まれた本の感想などなど気楽にお寄せいただければと思います。ただ、紙面に限りがありますので、掲載までに時間が掛かることや、場合よりまして一部カットしたりなどの手を加えることがありますのでご了承いただければと存じます。

- 5月の定例会: 5月23日(月) 12:30～ / おたより発送: 5月27日(金) 19:00～ 於: ばるるプラザ町田 6Fギャラリー